

もなく「お崩れ」といふ言葉は貴人の死に使はれる言葉で、下々の者の使ふ言葉ではありません。然るに出来るだけ鄭重な言葉を使はうとした結果、却つて他人が噴飯すやうな滑稽なことをいつたのでありまして、所詮柄にないことはいはぬが好いのであります。此の場合でも、

「奥様のお父様が死なれたさうですよ。」といへば、甚ださつくばらん言葉であります。別段非禮でもなければ可笑しくもありません。普通の言葉であります。更に今一步進めて、「奥様のお父様が、お亡くなりになつたさうですよ。」といへば萬點であります。

一體言葉は、死ぬとか、暮すとか、食ふとかのやうに、その行動をそのままにいふのは下品な言葉でありまして、死ぬのを亡くなる、暮すといふ代りにお過し、食ふを召し上るといふやうに、間接的に申しますと大變品よくなるのであります。従つて社交語といたしましては、出来るだけ此の種の言葉を使つて欲しいものであります。外國でも社交的な挨拶の言葉には、デスとかポデイとかいふやう直接的な言葉は決して使ひませぬ。此の點は日本と少しも變りはありません。

尤も、繰り返して御注意しなければなりませんのは、前例のやうに、努めて上品な言葉を使はうとした結果、飛んだ失敗を演ずることがありますから、よく注意しなければなりません。殊に死亡などいふ非常事件の場合の挨拶は、誰しも不馴れでありますから、餘程注意しなければなりません。

### 友の母の死を聞き駭付けた人の挨拶

「御免下さい。お早うございます。と（挨拶一禮）只今承りますれば、昨夜急にお母上様（お母様御賢母様、御尊母様）が亡くなられましたさうで、嘸かしお力落し（御落膽、御残念のこと）でございますませう。と（挨拶一禮）先達て中からお加減がお悪いとは薄々承つて居りましたが、急に斯様なことにならうとは夢にも存じませんで、惨々お見舞にも上りませぬ、誠に失禮いたしました。と（一禮）お取込み中却つてお邪魔とは思ひましたが、取り敢へず謹んでお悔み申し上げます。どうぞ皆様に宜しくお傳へ下さいませ。と（挨拶一禮）さようなら。と（重ねて挨拶一禮）」

### 逸早く悔みに來た友に對する答禮挨拶

「お早うございます。と（挨拶一禮）有難うございます。全く私共でもこんなに早く（呆氣なく）逝くとは思ひませんでした。が、可愛想なことをいたしました。と（挨拶）然し、年からいへばまあ不足もいへませんから、一同諦めて居ります。と（挨拶）御多忙中に拘らず、御遠方の所を早速お悔み下さいまして、有難うございました。と（挨拶一禮）」

## — 死亡通知の挨拶

(近來は角張つたことが段々廢れて参りましたが、本来なら死亡通知を口頭でする場合は、必ず二人で行くのが慣例であります。假令子供でもよいから、餘計のやうだが一人連れて、二人で行くのであります。そして、多くの場合不幸のあつた家の人は行きません。大抵隣家の人が駆け付けるのであります。)

「御免下さい。今日は。と(挨拶一禮)私は御當家様の御親戚に當られます。(兼ねて御當家の御主人様と御昵懇になさつて居られました。)

〇〇村の〇〇家の御近所に居ります〇〇と申す者でございます。と(挨拶一禮)實は昨夜、兼ねて御病氣中でございます。御老母様が、俄に御重態になられました。今朝午前三時二十五分に、とうとうお亡くなりになりました。(御他界遊ばされました。)

お宅様とは御存命中殊の外御昵懇に願ひ申して居りましたので、早速お知らせしてくれとのことでございます。お亡くなりになりました。取るものも取り敢へずお知らせに上りました。と(挨拶一禮)お目にはかゝりませぬが、どうぞ御主人様に宜しくお傳下さいませ。と(挨拶)では、御免下さいませ。さようなら。と(挨拶一禮)

注意(此の場合通知を受けた主婦は、女中に命ずるなり自分でするなりして、息吐きのお茶を出

します。又田舎などで、遠方からの知らせでしたら、食事時分なら簡単な食事を供することをお忘れはなりません。場合によつては、お膳の上でお酒を一本付けて、元氣を付けさせるのが禮であります。又子供には、有合せの菓子など紙に包んでやります。)

## — 實母を失つた人から通知の挨拶

「御免下さいませ。と(挨拶一禮)御承知の通り皆様方の御同情に依りまして、一時は大變快方に向つて居りました母が、突然今朝程から急に苦しみ出しまして、二十分程の後にとうとう亡くなりました。と(一禮)病中は種々御心配をおかけ致しましたが、死去いたしましたも又お手間をお取りいたしましたして、誠に申し譯がございませんが、何卒宜しく願ひ申上げます。」と(挨拶一禮)

## — 祖父を失つた人から通知の挨拶

「御免下さいませ。と(挨拶)先達てからお父様が少々不快だと申しまして休んで居りましたが、今朝四時頃に安々と永眠いたしましたから、一寸お知らせいたします。と(挨拶一禮)お葬式は明後日、午後二時に自宅出棺。〇〇葬儀場で執行いたしますから、何卒宜しく願ひ申上げます。と(挨拶)

一禮) ハイ、年は本年八十九才でございます。と(挨拶) それでは何卒宜しくお願ひいたします。さ  
ようなら。と(一禮)

——妻を失つた人から通知の挨拶

「愚妻夏子の産後の肥立ちが宜しくございませんで、皆様御心配をお掛け申しまして居りましたが、  
お蔭様で一時は大變よくなつて居りましたものですから、皆の者も稍や安心いたして居りましたが、  
今朝十時頃、心臓麻痺で急に無くなりましたしてございますから、一寸お知らせいたします。と(挨拶一  
禮)どうぞ宜しく。と(重ねて挨拶一禮)

——祖母を失つた人に対する挨拶(對話)

A 永らく御病氣で居らつしやいました祖母様には、お手厚い御養生の甲斐も無く、昨日とうく御  
逝去なさいましたさうで、定めしお力落しの事と存じます。と(挨拶一禮) 是はほんの些少でござい  
ますが、御霊前へお供へ下さいませ。と(挨拶一禮)

B ハイ、有難うございます。本人存命中は、種々お世話様でございました。其上に御香儀にまであ

づかりまして、誠に有難うございます。と(挨拶一禮)

A 今後は何卒、皆様のお身體を御大切に下さいませ。と(挨拶)

B ハイ、有難うございます。何から何までお心盡しの程、誠に有難う存じます。と(挨拶一禮)

A それでは御免下さいませ、さようなら。と(一禮)

——母を失つた友への挨拶(對話)

友 お聞きいたしますと、永らく御病氣で居らつしやいましたお母様が、貴方様や皆様の必死の御看  
護の甲斐も無く、昨夜遂に御逝去なさいましたさうで、貴方様を初め御弟妹様も、定めしお力落しの  
事でございますませう。何とお慰めの御挨拶を申し上げまして宜しいやら、ほんとうに申し上げやうもご  
さいませ。と(挨拶一禮)

母を失つた人 母の存命中は一方ならぬお世話様になりました上、病氣中は御多忙中を度々お見舞下  
さいまして、誠に有難うございました。と(挨拶一禮) なくなりましても、まだ眠つて居ります様な  
感じがいたします。そして、今後の事共を考へますと、獨り氣が遠くなります様に思はれます。と。  
(挨拶)

友 御尤もでございます。さうでございますとも、併し思ふ様には参りませぬのが淨世でございますから、まだく世の中には、より不幸のお方も澤山居らつしやいますのでございますから、何卒思ひ直しなさいまして、少しでもお心をお慰めなさいませ。と(挨拶)此上は貴方が幼い御弟妹さまを可愛がつてお上になりますと、きつとお母様が先の世で、どんなにお喜びになるか知れません。と(挨拶)又其が一番お母様への手向けの御孝行でございますから、何卒お身體を御大切に、お氣をお取り直してお父上様をお助けなさいませ。と(挨拶)

母を失つた人 有難うございます。と(挨拶)いつもく貴方様にはお變りも無く、御親切にお力添へ下さいまして、蔭ながら涙を流してよろこんで居ります。と(挨拶)母無き後の私等は、何かと貴方様に御面倒の事ばかり申し上げませうが、何卒相談相手におなり下さいませ。と(挨拶)友 行き届きませんけれど、私の出来ませ限りは御遠慮無く仰しやつて下さいませ。と(挨拶)と同時に之は大變お粗末でございますが、此方は母からのお供へで、此方は私の心計りのお供へでございますから、何卒御前へお供へ下さいませ。と(挨拶)母を失つた人 お心盡しのお供へ、有難うございます。無き母も定めしよろこんで頂戴いたします事と存じます。と(挨拶)

友 今日、之で失禮いたしました。呉々も貴方様初め皆様のお身體を御大切にいたしますやう、御忠告申し上げます。と(挨拶)

母を失つた人 之は誠に端近で失禮いたしました。と(挨拶)どうも色々とお親切なお言葉を頂きまして、誠に有難う存じます。きつと仰せに従ひますのでございませう。と(挨拶)お歸りになりましたら、お母様に宜しくお傳へ下さいませ。何れ其内お禮に上りますのでございます。と(挨拶)さようなら。と(挨拶)

——お通夜に行く人の挨拶

(家族の者に對する場合。家族は看病の疲れや心の悲みのために、一室に閉ぢ籠つて就寢してゐることがよくありますが、必ずしもさうとも限りませんから、一例を掲げて置きます。)

「今晚は。と(挨拶)大切なお方が亡くなられて、定めし神心ともにお疲れでございます。と(挨拶)どうぞ奥でお休みなさいませ……これはいふてもいはなくても宜しい。近所の者で、極く親しい間柄だと申します。至つて不束者で、お間には合ひませんが、御用事がありましたら、どうぞお言ひ付け下さいませ。と(挨拶)そして、今度は列席の一同に向つて、皆様、御苦勞様でござ

います。と（鄭寧に一禮、そして靜かに立つて、佛前に行き、此時初めて持參の香奠、線香などをそつと供へて、お線香を供します。お線香は何本立てても宜しいが、必ず一本々々離して立てるのが習慣であります。又香奠でなく菓子や果物などの供物を持參した時は、初めの一通りの挨拶を終つた時、なるべく他人に目立ぬやうに、家族か又は一族の者に）これは甚だ輕少でございますが、どうぞ佛前（御靈前）へお供へ下さいませ。」と（挨拶して差出します。）

（一族の者か親戚の者に對する場合）

「めつきりお寒くなりましたが、お宅様では皆様お變りもございませんで、何よりでございます。と（挨拶一禮）此度は又、此方様（御當家様）では、〇〇様がお亡くなりになられました、日頃御慰懇な（大切な祖母様をお喪ひなされました）貴方様は、嘸かし御愁傷でございます。と（挨拶一禮、御愁傷といふ言葉は死亡者の親戚の者か一族の者や極く親しい知人に對して申します言葉で、死亡者の家族に對しては、前例で申しましたやうに、お力落とし、御落膽など、申します。それより佛前へ行つて、線香を供へることは前例同様であります。）

— 葬儀當日の挨拶 —

（葬儀當日は取込み中でありますから、餘り嘸々しい挨拶はいたしません。尤も初めて家族や親戚や一族の者に面會いたしましたら、大體前に申し上げましたやうなお悔みを述べます。親しい友人や隣家の方なら、既にその前にお悔を述べてゐる筈でございますから、極く簡單に）

「お疲れでございます。と、（挨拶一禮）どうぞ御無理をなさいませんように……。」と（挨拶一禮、又、近親や親しい友人に對しては、）

「今日は御苦勞様でございます。」と（挨拶一禮いたします。）

（又、隣家の者でも差して親しい友人でもなく、死亡通知の書状をもらつたために、お寺なり自宅で行はれる告別式に列席される方は、態々家族を探してまでお悔みを述べなくても宜しうございます。必ず葬儀委員が入口の受付に居りますから、そこへ名刺を差出して、帽子、マント、オーバーなどを脱いで傍に置き、佛前に進んで抹香を供します。その供し方は、靜かに佛前の二三歩前まで進んで一禮し、更に進んで、死者の冥福を祈りながら抹香を摘み上げて軽く頂き、備への香爐に供し、同じことを三度繰り返して、改めて鄭寧に一禮して三歩後退し、踵を旋らして葬儀委員の方に一禮して歸途に付きます。尚ほ當日香奠を持參される方は、焼香する前に、懷中から取出して佛前に供します。）

—會葬の御禮挨拶(對話)—

(會葬のお禮には喪主は行きませぬ、親戚の者や一族の者が連れ立つて行くのが慣例になつて居ります。)

禮者 只今(先程、今日)は、御遠路の處を御會葬下さいまして、誠に有難うございました。何分取  
込中の事で、萬事不行届で申譯がございませんが、何卒御免下さいませ、失禮でございますが、何卒  
皆様に宜敷お傳へ下さいませ。さようなら。と(挨拶一禮)

家人 取込中、御鄭重な御挨拶で恐入ります。お跡が定めしお淋しい事でございませうが、皆様お身  
體を御大切になさいませう、どうぞ皆様によろしくお傳へ下さいませ。と(答禮挨拶一禮)

注意(總て悲しい事に接しました場合は、必ず御自身も先方の方の心になつて、言葉及び動作に  
氣を付けなければなりません。)(例へば)先方は泣て居るのに、笑顔で挨拶しましては、失禮も  
甚だしいのであります。又動作も餘り活潑にするのは、好ましくありません。敬意でなくても  
先方の人は非常に氣にするものでありますから、よく注意しなければなりません。)

—葬儀後家族に對する挨拶—

(佛教なら初七日、二七日といふやうに、七日々々の佛事がありますが、神式では十日祭、二十日祭  
といふやうに、十日目々々々にお祭がありまして、親戚の方や親しい方が列席されますが、その時の  
御挨拶の仕方は、)

「今日は好いお天気で、誠に御結構でございます。と(挨拶一禮)その後は定めしお淋しいことで  
ございませう。お察しいたします。と(挨拶)〇〇様(亡くなられた方)はお可哀さうでございますが、  
餘り御心勞なさいまして、若し貴方の御健康に障りますやうなことがございましては、それこそ亡く  
なられた方の御本意でもあるまいと存じますから、どうぞ餘りお歎き遊ばし(なさい)ませぬやう、  
お願いいたします。と(挨拶一禮)

—良人を失つた人に對する挨拶(對話)—

見舞人 御主人様には永らく御病氣で居らつしやいましたが、あれやこれやと種々御養生遊ばして居  
らつしやいましたから、定めし其内には御全快遊ばす事とのみ思つて居りましたのに、ついに御永眠

遊ばしましたさうで、嘸かし御落膽のことでございます。深く御同情申し上げます。と(挨拶一禮)

主婦 ハイ、有難うございます。と(挨拶一禮) 主人の存命中は、御多忙にも拘らず、色々御厄介をお掛けいたしました上に、一昨日は遠路の處を、御主人様にはお葬送り下さいまして、誠に有難うございました。と(挨拶一禮) 實は是非共今一度全快させ度いと存じまして、種々と手を盡しましたのでございますが、天命が過ぎましたものか、ついに歸らぬ旅に趣きましてございます。と(挨拶一禮)

今日は御繁多な奥様にまでお悔みの御挨拶を頂きまして、誠に有難うございます。と(挨拶一禮)

見舞人 イ、エ、此位の事に何のお禮に及びませう、貴方様には永々の御心盡しのおみとりで定めしお疲れのことでございます。と(挨拶) 此上は御看護のお疲れが御出ませんやうに、お氣をお付け遊ばせ(なさい) お役には立ちませぬが、何か御用がございましたら、御遠慮無く仰しやつて下さいませ。と(挨拶)

主婦 ハイ有難うございます。只今の處では、何んだか氣ぬけがいたしましたやうで、何と申し上げまして宜しいやら、御挨拶の致し様もございません。と(挨拶)

見舞人 野邊の送りもお済ましになりましたから、一層お淋しい事でございます。と(挨拶)

主婦 左様でございます。ほんとうに夢うつゝのやうで、貴女様にも失禮をいたして居りますが、何卒御免下さいませ。と(挨拶一禮)

見舞人 でも、お宅様にはお子様方が居らつしやいますから、せめてものお楽しみで居らつしやいます。と(挨拶)

(御養育) にお心をお慰め遊ばし(なさい) ますやう、お進め申し上げます。と(挨拶)

主婦 ハイ、有難うございます。貴女様の仰せの通り、今後は子供共をたよりに、皆様に御厄介をお掛けしまして、其日々を暮らして参りますつもりでございますから、何卒御面倒でございます。と(挨拶)

見舞人 それはもう、仰しやられますまでもございせんが、私共のやうに子供一人もございせん者(自分の不幸でなくとも、何か他人の不幸の例を擧げても宜しい)に比べますれば、貴女様等は、ほんとに、御不幸中の御幸福で居らつしやいますわ。と(挨拶)

主婦 貴女様のやうに仰しやつて戴きますと、いくらか心が明るくなるやうでございます。誠に有難うございます。厚くお禮を申し上げます。と(挨拶一禮)

見舞人 今日は之で失禮いたします。何卒御用の節は御遠慮無く仰しやつて下さいませ。そして、呉もお身體をご大切に下さいませ。さようなら。と(挨拶一禮)

主婦 どうも有難うございました。何れ忌明になりましたら、お禮に参上いたしますが、お歸り遊ばしましたら、御良人様へ、呉々も宜しくお傳へ下さいませ。と（挨拶一禮）  
 見舞人 ハイ、左様申し傳へます。と（挨拶、同時に立ち上り、玄關に至り自己の纏へる品物を持ち、茲にて最後の）さようなら、お大事に。と（挨拶一禮）  
 主婦 失禮いたしました、御免下さいませ。と（挨拶一禮）

### 小説に於けるもの、言ひ方

今まで申上げました挨拶の言葉は、對話であると單なる挨拶の言葉であるとを問はず、すべて挨拶の型を申上げましたわけで、そこには生きた心の動きといふやうなものは、素より現はすことは出来ませんでした。これは劍術や柔術にも型がありますのと同様で、型そのものには生きた生命はありません。型はどこまでも型であります。  
 そこで私は、蛇足かも知れませんが、現代文壇に於ける諸大家の小説の中から、適當な會話を切り取つて参考までにお目にかけてみたいと思ひます。

### 愛翼千里

（岸田國士作）

#### ——愛情の期限——の一節

（獨逸の陸軍大尉として青島に出征したルトウイヒ・タンネンベルクは、日本軍の猛烈な攻撃によつて青島が陥落するや、捕虜として、戀しい妻藤子の故國たる日本に護送されて、其捕虜收容所に幽囚の日を送ることとなりました。

妻藤子も二人の子供や家庭教師のオルリック嬢など、共に日本へ歸つて来て、時折り捕虜收容所を訪ねて良人を慰めて居りました。併し、捕虜として凡ゆる自由を失つたルトウイヒには、焦燥と懊惱が日一日と深まるばかりで、而かも、それは人種の相違といふ争はれぬ事實から、藤子の貞節をまで疑はなければならぬ心理状態にまで導かれたのであります。

さうした折も折、藤子が来る筈の面會日に、藤子は来ないで、家庭教師のオルリック嬢が、代理として二人の子供を連れて来たのであります——對話はオルリック嬢から始まつて居ります。――  
 オルリック嬢「マダムは喉を少しお痛めになつて、今日は伺へないからつて、私がお子様方のお供を



するやうに申しつかつて参りました。大したことはないんですけど、お聲が變だからお聞かせしたくないつておつしやるんです。でも、早朝からお菓子をお作りになつて、これ、よろしかつたら、フックスさまにも召上つていたゞくやうにしてお言傳でございます」

ルトウヰヒ「フックスか、フックス見習士官は、もうこゝにはゐないよ」さういひながら、ルトウヰヒは、エルンスト（子供の名）を抱き上げた。

オルリック「あら、どちらへお移りになつたんですか」

ルトウヰヒ「あゝ、衛戍監獄へ移つた。が、まあ、こんなことは、まだフジコ（藤子）の耳へ入れない方がいいよ」

オルリック「なにか、規則にでもお觸れになつたんでせうか」

ルトウヰヒ「觸れたところぢやないんだ。可哀さうに、あいつも、長い命ぢやあるまい。君は、しつかりしてるから話すが、やつ、脱走を企てゝ、今日の軍法會議で死刑の宣告を受けたんだ。それも……」と云ひかけると、立會の富樫中尉が、手で制した。

富樫中尉「ちよつと、その話は、まだ公表しないでくれ給へ」

ルトウヰヒ「あゝ、これや失敬……。ぢや、今は取消しだ」ルトウヰヒは、無表情のまゝ呟いた。

すると、オルリック嬢が、話をかへて、

オルリック「マツヲ少尉は、召集解除におなりになつたんですつてね。昨晚、御挨拶においでになりました。エルンストと好いお友達になつたんですの……」

ルトウヰヒ「さうか、エルンスト？ あの小父さんは好い小父さんかい？」

エルンスト「あゝ、家主の小父さんよりいゝよ」（エルンストは、ぶつきら棒に答へた。）

ルトウヰヒ「マツヲ少尉には、いろいろ世話になつてゐるらしいが、先生よくそんな暇があるね。時々顔を出してくれるかい」

オルリック「えゝほどんど三日目ぐらゐに……」

ルトウヰヒ「それも大變だな。何れ神戸へ引上げるんだらうが、ゐなくなると、フジコも淋しがらだらう、ある意味でね」

オルリック「ある意味で……さうですわ。やつぱり、男の方ですから、女家族にとつては、どこか力になるんですわ」

ルトウヰヒ「話好きつていふんだらうな」

オルリック「他人にはなかなか出来ないことですわ。お父さまの關係があるからでせうけれど……」

それにあれが日本人のいゝところであろうが、家庭的に、可なり立入つた世話までして下さいますから、それや助かりましたの」

ルトウイヒ「そんなことまでしたのか」

オルリック「えゝ、でも、家を借りる世話やら、女中の周旋やら……買物をする店の注意まで……」

ルトウイヒ「それや聞いたよ。まさか、子供の教育のことまでは立入るまい」

オルリック「むろんですわ。ベルタ（子供の名）さんは、もう書取がおできになるんですのよ」

ルトウイヒ「それも聞いた。日本語も達者になつたらう」

オルリック「マダムが絶対にお教へになりませんの。そんなに窮屈になさらなくてもいゝつて申上げらるんですけれど……」

ルトウイヒ「さ、ベルタ、今度は、お前の番だ。こいつはいやに軽いぞ。日本に来て、野菜ばかり食はされてるんぢやないか」

オルリック「あら、随分なことおつしやるババね。足をばたばたやつてお目にかけてごらんさい。

さうさう、さうよ、ババが瘦れ我慢をなすつてらつしやるのよ」

ルトウイヒ「それで、なにかい、これから、子供たちを運動に連れて行くつていふわけだね」

オルリック「はあ、そのつもりでをりましたんですけれど、なんですか雨になりさうですから……」  
 （オルリック嬢は、ぼんやり空を伺いだ。——言葉の端々にのぞく感情の裏を、聞くものが聞けば、おのづから捉へ得ると思ひます。）

## 良人の悪友

（山中峰太郎作）

### ——知らざる妻にも罪なきや——の一節

（會社員山田君の妻チエ子さんと、木村君の妻ヨシ子さんの對話、話題は月給生活者の不景氣な話から始つて）

ヨシ子「お宅で佐竹さん（同じ會社の社員で、病氣のため湯河原に轉地して居る人）をお見舞にいらしたの、いつのことですかいますか？」

チエ子「昨日ですわ。東京驛から三時間あまりもかゝるつて、夜中に歸つてきましたのよ。なんだか疲れきつた顔をして、氣の毒でしたわ」

ヨシ子「マア！ では、昨日？ 昨日いらしたんですの？」

チエ子「え、アラ、奥さんどうかなすつて？ お顔色が急におわるいやうですわ。アラ、どうなすつて？」

ヨシ子「奥さん？ 宅でも、会社の命令だつて、佐竹さんをお見舞に行きましたのよッ！」

チエ子「エツ、お宅でも？ いつでして？ それは？」

ヨシ子「一週間ほど前ですわ。そんなに、しげく〜と会社が命令するんでせうか？ どうも變ですわ」

チエ子「マァー、とても變ですわ。でも、湯河原からおみやげを持って来てくれましたのよ。行ったことは行つたんでせうねエ？」

ヨシ子「さあ？ 家にもおみやげを、ぶら下げてきましたのよ。奥さん、これは油断ができませんわ。決して信用できませんわ！」

チエ子「どうしませう？ もしも、だまされてるんだツたら、あたし、承知しませんわ！」

ヨシ子「あたしだつて、承知できませんわ。どうしてやりませう？」

チエ子「奥さん！ あなた、鹽谷さんの奥さまを、ごぞんじでらして？」

ヨシ子「會計部長の鹽谷さんの。え、ぞんじてますわ」

チエ子「あの方のお家へ伺つて、それとなく、お尋ねしてみますわ。あたし、これから直ぐに行つて」

ヨシ子「さう！ それが一等ですわ。では、あたしも、お供しますわ、御一緒に。ちよつと待つてらして下さいませんか？ すぐ仕度しますから。あ、本當に、なんてことでせう！ クサク〜しますわ」

チエ子「なんだか昨夜おそく歸つてから、あの人が、ソワ〜してるんですよ。さう思ふと、いよいよ變ですわ」

ヨシ子「さうですの？ 宅では、こんなこと言ひましたわ、「なんだか近頃、おまへが妙に新しく見えだしたよ」つて、ばかにしてるんですわ、イマイましい！」

チエ子「さア、お仕度あそばせな、奥さん！」山田君と木村君が、会社の命令で同僚の見舞に行くといふ口實で、實はよからぬ所へ遊びに行つたことが、圖らずも二人の妻君同士の話から曝露したのであります。

## 結婚條件

(菊池寛作)

### ——僕では？——の一節

(濱野家の奇遇者で主人の姪の光枝と、濱野家の次女紀子の愛人信三との對話、信三も實は光枝を

憎からず思つてゐる。又信三の友人で、濱野家の長女園枝との縁談を拒絶した成田辰男も、光枝を愛し、二人は人知れず帝國ホテルで會食したほどの間柄でありました。

光枝「私、たゞ一度成田さんと他所で、お目にかゝりましたの、それを園枝さんが、誰からかお聞きになつて、それは〜ひどい事をおつしやるんですもの。それに、今日は、いきなり知らない方とお見合をさせられたりしましたので……」

信三「貴女の承諾なしにですか……」

光枝「はあ」

信三「それはひどいですな」

光枝「それで、とにかく成田さんに、御相談をしようと思ひまして……あの方にお會ひ出来ない、今夜にも行く處がございませんの……仕方がなければ、津山へ歸るんですが、それも義理の父なものですから、……すみませんが、もう一度お電話をかけて見て下さいませんか？」流石は第一流の大家だけに、此の短い會話の中にいひ知れぬ人生の波瀾が藏されて居り、二人の心の動きが生々として活寫されて、禮儀作法に適つた會釋や目の動きまでが明瞭に觀取されるではありませんか。せつば詰つた窮境に居て、猶且つ取り亂した所のない光枝の床しい心境をよく〜觀察して戴きたいと思ひます。

### 訪問答禮の心得と作法

#### —訪問の時刻

先づ人を訪問しようとするには、第一に先方の都合を考へなくてはなりません、至急を要する時の外は、或は先方の指定以外の時は、午後の一時—三時頃までの間が一番よろしい。尤も、近親及び親友間のことであれば、夜間の訪問も差支へありません。

#### —對談の時間

公務のため、若くは尊貴の人を訪問した場合には、極めて簡単に用件を話して歸らなくてはなりません。用件にもよりますが、普通會話の時間は十五分乃至三十分位を適度といたします。強ひて止められた場合は、振り切つて歸ると云ふのも禮を失します。要は先方をして「今少し話し度い」と思はせる所で、辭去するのが味があります。

## — 訪問の服装

人を訪問するにあたっては、先づ服装に注意しなければなりません。服装は身分相應が一番大切であります。慶事の場合は派手な物でもよろしいが、之に反して凶事の場合には、精々地味な装ひでなくてはなりません。

身綺麗にすることは何時でも必要であります。華美な服装をして、富裕を誇るやうなことがあつてはなりません。身分のある人や、初めて人を訪問する場合には、特に服装に氣をつけて、禮儀に適つたものを用ふべきであります。

## — 名刺の心得

名刺は餘り大きなものや、小形の畫模様のあるものや、磨いたやうな艶のあるもの等は避く可きであります。普通一般に使用するものは、縦が二寸五分、横巾が一寸四分内外の寸法で、字體は楷書か行書體の判り易いものを選ぶがよろしい。

又、名刺がなくて訪問する場合、婢僕が往々姓名を誤つて傳へる事があるのみでなく、主人不在の

時などは、自分の訪問した事をわすれて、主人に通じない場合が往々あります。

人を訪問して不在であつた場合には、名刺の上部の一方を二三分程表の方に向けて折つて残して置きます。

凶事用ふる名刺は反對に裏の方へ折るか、黒梓のものを用ひます。

婚姻、死亡、出産、旅行等の通知を受けた時は、品物は直ぐに送らなくとも、名刺は必らず贈る方がよろしい。

新年の名刺には姓名の上に賀正、若くは謹賀新年と記し、出發の時にはお暇乞と書きます。

## — 取次を乞ふ場合、不在の場合

訪問する時は、先づ玄關又は入口で聲をかけ、或はベルを押して取次を乞はねばなりません。案内なくして入込み、若くは裏口から遣入る等は失禮の極であります。取次人が出ましたら、名刺を出して來意を述べます。

若し不在の場合は、名刺を置いて成る可く來意を告げておくがよろしい。濫りに出先を問ひ、或は歸宅の時間を尋ねるのは失禮にあたります。歸宅の時間を尋ねる必要があれば「何時頃に來たら面會

出来るか」と問ふがよろしい。

— 應接室に案内された時

案内によつて應接室、又は座敷に通される場合には、先づ玄關なり控室に、帽子及び外套、コート  
を脱ぎ手早くたゞみ、御婦人なれば肩掛、手袋、其他の携帶品を取亂さぬ様に正しく置き、而して、  
容儀を整へてから客室に這入つて行きます。

先づ下座に控えて、主人が見えたらば、座蒲團から下りるか、又は椅子を離れて叮嚀に挨拶せねば  
なりません。

挨拶が済めば、主人のすゝめによつて着座いたします。若しその際に、上座にすゝめられたら、一  
應は辞退すべきであります。再三進められた際には、無氣に辞退しては却つて失禮にあたりますか  
ら、着座するがよろしい。

特に西洋人の前では、遠慮は却つて非禮にあたります。  
日本間では床のある方を上座とし、西洋間では暖爐のある方を上座と致します。

立ち居の作法

— 坐り方

座るには、先づ兩足の爪先を揃え、右の足を少しくひいて、靜かにひさまづいて、下座の膝を上座  
の膝に揃え、右の足の拇指の上に重ね、(男子は之れと反對)手は右の掌の上に重ねておきます。永く  
座つてゐて疲勞をおぼゆるやうな時は、足の拇指と拇指とを、そつと重ねかえれば樂になります。

— 立ち方

立つ時は、體を眞直にして、兩手を少しく斜めに股の所にそへ、姿勢を整えてから、腰に力を入れ、  
先づ左右の足先きをつま立てゝから、右の腰をたて、姿勢をくづさず、靜かに立ち上がります。  
目上の人と共に立つ時は、必ず自分ほうしるに立ちます。

椅子、腰掛等からはなれる場合は、先づそのものを後に少しくひいてから、靜かに、徐に立ち上  
ります。

— 退 き 方

左の足から進む時は、右へまわり、右の足から出た時は、左へまわり、ひくには右のめぐつた時には、右の足先きを左のかゝとの所まで斜めにひき、次に、左の足を同じ方にひいて、斜めに下座の方へ向ひ、そして下座の足からあゆんで歸ります。左へめぐつた時は、此の反對に致します。

— 歩 み 方

先づ手を兩股のそばの所にそへ、肩、膝を張らず、縮めず、如何にも自然のまゝに大股にならず、小走りにもせず、歩みます。

足を高く上げないこと、殊更に疊をすり、音を立てないやうにする事、敷居は勿論疊の縁をふまないうやうに歩む事、裾風の立たないやうに注意する事、人と歩む時には、目上の人に對しては、左後につきしたがひ、通り道のかたはらに物がある時は、之れをかたはらに押しやり、通り道に物品がある時は、裾又は袖にかゝらぬやうに注意する事、普通一間を三步半位にするゝと靜かに歩みます。往來を歩く場合には、落着かないでわき見をしたり、やかましく下駄の音等をひゞかせたりするこ

とは、慎しまなくてはなりません。

— 着 座 の 心 得

着席の際は、着物の前をよく合せる事、袴をつけてゐる時は、兩手を袴の兩側に入れ、少しく袴を上げたのちに座る事。羽織を着てゐる時は、羽織の裾をさばいてから着座する事、他人とともに座る時は、席をゆづる事、自分が上座につく場合は、下座の者に會釋する事。着座中目上の人より、物を言はれた時は、兩手を膝頭のわきにをき、指先きを向ふにして、掌を疊につける事。(話しかける場合も同様にいたします)

— 腰 の かけ 方

近頃では、椅子に腰かける場合が多くなりましたが、さういふ際には、長上の命をまつて、靜かにかけるのが作法であります。

椅子に腰をかける際は、腰をふかくかけ、前へですぎないやうにし、兩足はキチンと揃へて置きます。長椅子又は大きな椅子等に腰をかける時は、片すみに窮屈そうにしてゐるのはよろしくありません。

ん。さうかと言つて、後によりかゝつて、反り身になつたり、肱掛等に兩肱をかけて大きく廣がつてゐたりするのは無作法であります。

—立禮の心得

下輩の者から、上輩の者に向つてする立禮は、手を兩膝にそへ、上體をやはらかに、八十度にまげて、鄭重に行ひます。

上輩の者が、下輩の者にこたへる場合には、上體を十度乃至二十度位に曲げます。

—座禮の心得

座してゐる人に對しては、必ず座して行ひます。拜禮の場合は、先づ兩手を膝の前に、はなれぬやうについて、その爪先きを合せ、八字形をつくり、頭を爪先きの上の所まで下げて行ひます。

頭を下げる場合は、徐々に下げます。

—人の前を通る時の心得

人の前は出来る限り通らぬを良しといたしますが、やむを得ぬ場合は、特に座つてゐる人の前を通る時には、その人が同輩である場合には、片膝をついてソツト會釋して過ぎるか、若し急ぎの場合であつたならば、軽く目禮だけして通りませす。

其人が貴人の場合であれば、その前で立ち止り、その方へ向き直つて座つて一禮し、更に立ち上がつて方向をかえ、體をかゝめて行きすぎませす。又、先方が椅子の場合には、一寸小腰をかゝめて、すぎればよろしい。

—戸障子の開け方、閉め方

戸、障子を開くには、引手の方を前にして斜めに座り、右に開く場合は右の手を下につき、左の手を引手にかけて、三四寸ばかり開いてのち、左の手につきかえ、右の手を戸、障子の縁の下から四五寸上の所にかけて、靜かに、一つばいに開きます。左へ開く時は、これと反對に致します。

閉める時は、引き手を前にして同じく斜めに座り、右へ閉める場合は右の手をついて、左の手を引手にかけ、靜かに引いて、三四寸ばかりになつた時に、左の手につきかえて、右の手で閉めます。左へ閉める時はこれと反對にすればよろしい。



開閉の場合には静かにするのは言ふまでもありませんが、元しめてあつた所を、開放しにしておいたり、一、二寸開けのこしておく等は、見苦しいものであります。

— 案内の仕方

別間とか、庭園とか、便所とか、湯殿とかへ客を案内するには、自分が先きへ立つて導きます。

— 座布團の薦め方

座布團を客に出す場合、その座布團が折り易いものであれば、二つに折つて右の手に持ち、右脇に下げて出ます。客の下座にきた時、座して之を擴げ、先づ挨拶した後に、座布團に両手をかけて押しすすめます。又折り難いものであれば、布團の中程を右の手で下げて出して、前の通りに座つて進めればよろしい。若し先方が身分ある尊い人であれば、座布團の裏の中程を左の掌で受け、右手を縁に添へて、客人の後方、下座より差出して、恭々しく進めます。

若し座布團が細長いものであれば、長い方が客の前後になるやう、縞物であれば縞目が客の左右になるやうに差出すのが禮であります。

— 座布團の受け方

右のやうに出された場合に、出した人が主人、若しくは主婦であれば、客は先づ叮嚀に會釋して、一應立上つて更めて座らなくてはなりません。其座り方は、下座の膝を先に突き、次で片膝を載せ、両手を軽く前に突いて居づくろひを直します。歸る時は、折り易い物ならば二つに折つて後方へ靜かに押しやり、若し折りにくい物ならば、そのまま後にやつて挨拶をして立上ります。

— 煙草盆の出し方

煙草盆にもいろ／＼の形があるが、いづれもその持ちやうは同じであります。持ち方は火入がお客様の左（自分の方より右）灰吹が客の右になるやうにして、左右の拇指をその横の中程にあて、残りの四本を能く揃へて下より受け、膝を張らず身體を真直にし、乳の下の部まで上げて持ち出し、客の前三尺許りの所で座つて下におき、煙草盆の兩脇に左右の手を添へて靜かに押し進めます。

次に、右の膝を少し後ろに引いて、一膝退き、両手を突いて一禮して立上り、上座の方へ廻つて退くのであります。長煙草盆には煙管を添へるのが習慣となつてゐますが、その場合は、吸口が客の右

になるやうにいたします。巻煙草の場合は、煙草箱が客の右（自分の方より左）灰受が左になるやうにし、灰受にはマツチをのせておきます。

— 煙草盆の引き方

火をとりかへるために煙草盆を引いて歸る時は、先づ客の前三尺許の所に座し、左右の指先を煙草盆の兩脇の手前の縁にかけて少しく引寄せ、一體して差出す時と同じに兩手で持つて、そのまま二膝程後へ退いて立上り、上座の方へ廻つて歸るのであります。火入れのみ持ち歸る事は慎まなくてはなりません。尙、煙草盆の灰殻は常に掃除して、客に出す時はその中に少し水を入れて出すがよろしい。

— 火鉢の出し方

火鉢にも角形、丸形、三つ足物などいろいろありますが、丸形、角形のものには必らず兩脇に手掛がついてゐます。そこで、先づ四本の指を兩方の手掛にかけ、拇指を上縁にかけて持つて出ます。客の前三尺許の所で例の如く座して火鉢を置き、靜かに押し進めて一膝後ろへ退つて一體して立ち上り、上座に廻つて歸ります。又手掛のない場合は、四本の指を底にかけ、拇指を縁に添へて持つて出

ます。三つ足のもの、その二本が客の前に出るやうに置くが作方でありませす。火箸は客の前の方に、その頭が客の右になるやうに、縁にもたせておきます。圓火鉢の時は、右向うに突き立てておけばよろしい。尙、引く時は煙草盆の場合と同様であります。

— 火鉢の火の直し方

客の前で火鉢の火を直す時には、先づ臺十能に火を入れて柄を右手に持ち、臺を左手で受けて持つて出ます。而して、客の前三四尺許の所に座して十能を下座の方に斜に置き、次に火鉢の兩側に兩手をかけて靜かに引き、少し持ち上げて下座の方に寄せ、さて灰を擴げ、十能の火を程よく移します。次で靜かに灰を掛け終つたら、火鉢を元の位置に直して前述の如く立上ります。火を入れる時に往々縁に灰がこぼれる事がありますが、此の際は手で拭はず、懐中紙で拭きとります。

— 煙草盆及び火鉢の受け方

客の方では煙草盆又は火鉢をすすめられた時に、會釋をするのは云ふまでもありません。火鉢より煙草盆を自分の使ひ易いやうに位置を直すことは差支へない事ですが、火箸で火をつくとか、灰を

掻くなどと云ふ事はつゝしまなくてはなりません。

—團扇の出し方

團扇を出すには柄が手前になるやうに、右の手で持ち、左の手で團扇の裏を受けて持つて出します。客の前三尺許の所に座し、柄を客の方に廻して進めます。尊貴の方に進める場合には、盆にのせて差出します。

—懷紙及び揚子のすゝめ方

懷紙を所望された時は、表二三枚を除き、右の手で折目の下を持つて進めます。又揚子は扇子の上のせ、揚子の先を客の左にして差出します。これはそのまゝとつて使ひ易いためでもあります。又箱のまゝですすめてもよろしい。

尙一言注意しておかなくてはならぬ事は、招待されて他家へ行く時は、懷紙は必らず持つて行かねばなりません。で懷紙は一帖を四つ折とし、その内二枚を以つて別に八つ折を作り、四つ折の内に入れておきます。これは杯を拭くとか、或は鼻をかむとかの場合の便利のためであります。

—手洗水の出し方

何れのお家でも、手洗水鉢が備へてありますから、特にその出し方などいらぬ様に思ひますが、嚴冬の際は冷水よりも温湯を出すべきであります。で、この際は、先づ清潔な手拭を頃合の大きさに疊んで裏にのせ、これを縁端の程よい所におき、湯桶水指の類に湯を入れ、小鹽と共に手拭と並べておきます。湯桶に柄杓をそへておくのは云ふ迄ありません。その時自分は次の間か、又は廊下の隅に控えて、客の出るのを待つてゐます。客の現れるのを待つて自分は跳き、左手或は右手に柄杓をもつて下座の方より徐々に客の手にかけます。かけ終つた時に、左の手を下につき、右の手で手拭をとりあげて客に進め、客が拭き終つて返したならば、これを受けて軽く會釋します。客も同様に會釋をせねばなりません。

尙、こうした場合に、小鹽に温湯を入れて、手拭を添へて縁側に出しておいてもよろしい。醫師の診察を受けた際には、石鹼を添えておく可きであります。

—手拭の出し方

暑中のお客などに對して手拭をすゝめます時には、先づ手拭を横に四つに折つて、これを縦に二つに折り、小蓋又は盆にのせてすゝめます。手ですゝめます時は、左の掌にのせ、右の手を一寸添へて差出すのです。又絞つて出す場合には、疊んだまゝ小籠に入れて出します。

— 手拭の受け方

疊んだ手拭であれば右の手で手拭の右の端を持ち、左手でそれを下から受取ります。絞つたのであれば、籠のまゝで受取つて右側におきます。

— 小刀の出し方

果物の皮を剝く時か、或は他の必要から刃物をすゝめます時は、鞘の有無に拘らず、刃の方を左にし、柄を先力に向け、左手を軽く疊んについて右の掌にのせて出します。

— 傘の出し方

柄を左の手に持ち、右手で中程のところを持つて出て、一禮の後左手を下げて右手で上のところを

持ち、左手をも少し下げて、そのまゝ客が柄を受取るに便利のいゝやうに差出します。

— 帽子の渡し方

帽子は夏冬共に鉢巻の繼ぎめを我左にし、兩のふちを兩手で持ち、客の前三尺の所に跪いて、左足を一足引き、その膝を突いて頭を少し下げて兩手に捧げて差出します。若し片手で出す時は、左手は下に突いて右手で進めます。

— 帽子の受け方

帽子を受けるには、高帽子であれば手で縁をとり、左手は右手の首に添へて少し戴くやうに致します。

— 土産物の進め方

家苞物にもいろくあつて、一樣にはいはれませんが、凡て菓子如きものは紙に包み、膳の肴は重箱等は折詰とし、膳のものは一旦撤いてから別間でつめる可きであります。

—挨拶の順序

挨拶は先づ主人に行ひ、次いで主婦、家族に向つてするのが至當で、先客があれば最後に一體いたします。客が又多数の場合は、一齊に敬禮いたします。これが西洋人の家庭ですと、第一に主婦に向つて挨拶するのが作法となつて居ります。尙、日本人と西洋人の家庭とを問はず、訪問の際には、必ず主人に面會する迄は、取次の書生や女中に挨拶をするのは又法に反してゐるので、慎まなくてはなりません。

—暇乞の仕方

訪問の用件が済んで、いよ／＼暇乞の挨拶を申述べる場合には、その座を離れ、丁寧に暇乞の挨拶を申述べるのであります。かくすると、主人は必らず玄關まで送つて出やうとするが故に、その際は一應辭退しなくてはなりません。然し強ひて送り出して來られたならば、今度は更に一體して、而して再び主人の方を見返りながら、最後の一體をすれば宜しい。外套やコートの類は、主人の會釋があれば玄關で着用してもよ

ろしいが、手袋とか肩掛、帽子などの如きは、必らず主人の影の见えない所で着用しなくてはなりません。

—訪問禁物の條々

- 一、同伴せぬこと  
極く親密な間柄ならば小兒を伴れて行くは差支へないが、なる可くは同伴せぬがよろしい。犬、猫等の愛玩物をも同伴せぬがよろしい。
- 二、時計を見ぬこと  
談話中に屢々時計を出して見るのは、此の上もなき無作法です。
- 三、不行儀をせぬこと  
談話中は、不行儀な動作があつてはいけません。たとへば顔に兩手をあてるとか、髭をいぢつたりする類です。
- 四、電話にて在否を問はぬこと  
電話で、在不在を問ふてから訪問する方がありますが、これもある場合には大變便利に異ひありません。

せんが、時と場合により先方に對して失禮に當る事が往々あります。殊に先方がこちらよりも身分の上の方だとすると、尙更慎まなくてはなりません。

五、必らず紹介状を持参せよ

訪問すべき先方が如何なる階級の家庭であつても、先づ一面識もない場合は、直接訪問は無作法であります。先方の主人の知己の紹介状を持参して訪問するのが作法であります。その場合は、必らず自分の名刺を添て出すのが法式であります。

六、取込のある場合

訪問をした際に、先方に來客があるとか、或は他に何事かの取込のある模様を察したならば、面會を許されたとしても、速かに用件を話して歸る可きで、或は又後日を約して歸るべきであります。

七、召使などに對して

召使の者に對してあまりに傲慢な振舞をしたり、又あまりに慣々しく雑談を交すなどは、主人に對して失禮でもあり、あまりほめた事でもありませんから、慎まなくてはなりません。

八、乗物を利用する場合

乗物を利用して訪問する時は、必らず門外で自働車なり、自轉車なり、人力車をのりすてて、決して玄關際までそれらの乗物類を曳入れてはなりません。

挨拶訪問一般の注意

一、履物のこと

履物は玄關を上る時、自ら正し、下座の方から門口に向つて踏み揃へ、上座に向つてあがれば、先方の手敷を煩はすに及びませぬ。こうした事は極く些細の注意ではありますが、一見してその人の修養の程が偲ばれて、いかにも奥ゆかしく思はれるものであります。

二、取次人の心得

取次人はどんな貴賤貧富の訪客であつても、衣裳の美醜で客の價値を下し、應待に差別を設けてはなりません。

取次人の不注意のために、大切な用事の客を空しく歸し、又は主人の關知せぬ不々な思ひを客に與へる事があります。これらは心なき書生、下婢の失態でありますから、一家の主人なり、主婦たるも

のは、この點に充分注意を拂つて、訪問客に對して決して不快の思ひを抱かせないやう注意すべきであります。

尙、取次人は一度來訪した客であれば、再び其姓名を尋ねるまでもなく、記憶してゐるやうに心懸けるがよろしい。

### — 對客の心得

面會日を設けてない家庭では、何時來客が見えても差支へないやうに、茶、煙草盆、多ならば火鉢、又は暖爐の設けをしておきます。又、來客の際は、出来る丈け早く面會すべきであります。五分、十分と用事もないのに待たせておくのは、非禮も甚だしいのであります。

對話は爽快に、相客があれば紹介の勞をとり、その他萬事非禮に耳らぬやう、能ふかぎり鄭重に扱ふのが主人の義務であります。訪客が自分よりも身分が賤しく、衣裳など粗末の場合には、成る可く肩身狭い感じを起させぬやう、言葉使ひなどに至つてもよく注意しなくてはなりません。

### — 客の前で叱る勿れ

客と對話中に最も注意すべき事は、妻や子供は勿論のこと、召使や書生に對しても、少々位の失態に對しては叱言を云つてはなりません。こう云ふ際の叱言は、客に對して非常に不快の念を抱かしめ、殊の外非禮にもあたるのであります。

### — 家人の心得

來客中の家族の者は、目觸りになるやうな動作、耳ざわりになる様な笑聲も慎しみ、客の批評をしたり、障子等の隙間から隙見する等の事はつゝしまなくてはなりません。

### — 度々席を離れぬ事

客と對談中は、客のみのこして自分は他用に趣き、又は度々席を離れて忙がしさうに振舞つて、沈着のないのも不愉快な感じを與へます。對談中頻りに時計を見るなども、前にも申しましたが客を急がせるやうで甚だよろしくありません。

### — 泊客の場合

泊客を扱ふ場合は、十分その勞を休めるだけの手當をしなくてはなりません。朝は客の目をさまさぬ様に物事を静にし、その起き出るまでに、萬事仕度をすませておきます。又客室の戸は必ず後で開く可きであります。客が起き出た時は氣持よくこれを迎へ、洗面所の支度をして、洗面所に案内し、客の洗面中に床をあげ、室内を掃除いたします。かくて、それ等が滞りなく済んだあとで、挨拶を致します。

——客を送り出す時

客の歸る時は、主人初め、家内の者は玄關まで送り出して、慇懃に一禮いたします。その姿の見えなくなる迄見送らなくてはなりません。尙この際、あらかじめ來客の履物は、キチンと揃へておく事をわすれてはなりません。履物の取り亂れてゐるのは、客の感情を大變損する事が多いのであります。又客が歸つた後、直ちに室内を掃除するのは最も戒むべき事です。大騒を發して笑ふのも嚴禁しなくてはなりません。何か客の落度を笑つてゐる様に聞えて、決して面白いものではありません。

對談中の心得

客と對談する際は、客をして十分に話させ、こちらは成可く受け身になり、殊に初對面の人に對しては十分に、來意をたづね、その談しがをはつた時に、念のために「御用件はそれ丈でせうか」と一應念をおしてから、こちらが答えるべきで、談を途中にして口を出すなどは注意しなくてはなりません。それと共に態度も應揚に、相手に好感を與えるやうな様子でなくてはなりません。

——對談中の態度

人と相對する男子の場合には、脊すじを眞直にし胸をはつて、男らしき態度が何よりであります。左に心付いたまゝに、無作法な態度の例を擧げて注意をうながしておきます。

- 一、對談中、相手の顔を正視し得ないで、わき見をしながら對話するのは甚だ宜しくありません。
- 二、對談中指先きをもてあそんだり、顔をゴシ／＼かいたりすることも、宜しくありません。
- 三、對談中鼻汁をすゝり上げる人がありますが、之れは、もつての外の惡風でございます。更に鼻



の穴をいじるに到つては論外でございます。

四、對談中色々の色々のくせを持つてゐる人がありますが、之れ等は、つとめて矯正しなければなりません。例へば、對談中に體を振り動かすとか、爪をかむとか、頭を掻くなどは絶対に宜しくありません。

——言葉使ひの心得

對談中の姿勢は正しくなくてはなりません、言語、容貌等は溫和で、言葉は明瞭で、しかも落着いて話さなければなりません。

調子は、餘り高くなく、又低くなく、丁度中間位をえらぶべきであります。

年長者に對しては、相當の敬語を用ひ、後輩に對しても鄭重に話さなくてはなりません。言葉が、餘り下品でありますと、其人の人格等も疑がはれます。又、成可く言語は冗長、多辯を避けることも必要であります。

——談話する時の心得

相手が座してゐれば、己れも座し、若し相手が腰かけてゐれば、こちらも腰をかけて話すがよろしい。

對談中は、相手に自分の呼吸又は唾のかゝらぬやうに注意し、自分のみ話しをし通さないで、相手の話をきくやうにしなければなりません。

相手が對話を欲しない場合は、之れをすみやかに中止し、話題を他に轉じます。又、人の對話中、みだりに嘴を入れるのは宜しくありません。

——他人の談話を聞く時の心得

人の對話を聞くときは、姿勢を正しくする事は言をまちませんが、よしその話が己れの意にみたないものであつても、決して不快の色を表はしてはなりません。

次ぎに、談話中人をそしり、秘密をあばくやうな事があれば、成可く話題を他に轉ずるやうに心がくべきであります。

——物を問ふ時の心得

人に物を問はんとする時は、姿勢を正しくし、温容を以つて丁寧にかまひます。又、途上でたづねる場合には、帽子をぬぎ、丁寧にたづねます。先方が十分の答えが出来ない場合にも、あつく謝して、決して不平不満の色を表はしてはなりません。

—人に物を問はれた時の心得

問はれた場合には、親切、丁寧に教えるのがよろしいが、若し、問はれた事柄が、自分の不承知の事なれば、その旨を告げて、更に、人にたづねてから教えるか、或ひは自分よりもよく知つてゐる他の人を紹介するか、いづれにしても、出来得る限りの便宜を與ふべきでございます。

—軸物の掛け方

軸物をかけるには、先づ軸物をはける竹製の矢筈を軸物に添へて持ち出で、床の前三、四尺の處に跪いて左の手に持ちかへ、自分の右の膝側に矢筈を縦に置き、紐を右手に持つて靜かに引き出し、右の方に引き寄せて風帯の長さに應じて軸物を開き、上に重なつて居る風帯から開いて矢筈をとり、掛け緒の所を左の手にて持つて矢筈の先きに挟み、適宜の所まで開いて矢筈の柄元と軸とを右手で持

つて床にのぼり、手を伸して折釘にかけてから矢筈をはづし、軸を左の手に持つてゐる拇指に矢筈の先きをはさみ、矢筈の中段より少し上の方を右の手に持ちかへて壁に立てかけ、軸の両端を左右の手にて持ち、次第くゝに開いてゆき、上座の方の膝からひさまづいて、全く開き終つたなれば左の手に矢筈をとつて立ち上り、後ろ向きの上座の足から床をさがります。三尺ばかり下つて床の前に座し、右の側に矢筈を置き、両手を突いて軸物の曲つて居るや否やを丁寧に調べて、歪んで居ればそのまま立つてこれを直します。

広い床であれば二幅對、三幅對とかける事があります。こう云ふ時には、二幅對であれば初めに客位の方から掛け、つぎに主位を掛けるのであります。三幅對であれば、初めに中位と云つて真中のものかかけ、次ぎに客位と云ふ順序になります。取り除す場合には、後でかけたものから順次初めに及びます。

—軸物の見方

軸物を見るには、先づ床の前に座し、横疊一つを隔て、兩手を膝の側について、拜見いたします。三幅對であれば中より、客位、主位と順次に目をうつして行きます。

書にしても畫にしても、上から見下ろすのは失禮にあたります。下から見上げるのが作法です。

### — お茶の出し方及び受け方

茶は玉露のやうな上等品になりますと、ぢかに熱い湯を注いでほは緑茶本来の風味を出すことが出来ません。そこで茶を入れるには、一旦湯を注ぎ入れて適度な湯加減として用ひます。こういふ上等の茶は、茶椀に六七分目位を注いで客にすゝめまします。

併し、番茶、ほうじ茶等になりますと、器も大きな物をえらび、湯も成べく熱く多量に致します。

さて、茶椀を茶臺にのせて、兩手に持つて客の前にひざまづき、體を少し前に進めて供します。この際茶をこぼして茶臺をぬらすことは失禮にあたりますから、よく氣を付けねばなりません。

茶臺は客が茶椀を取るのを待つて持ちかへる事もあり、或ひはそのまゝにしておく事もあります。茶を受ける時には、茶椀を右手に取り、左手をそれにそへ、背を立てぬやうに普通に飲み終つて茶臺の上のせて置きます。半ば飲んだまゝ下に置いたり、或は又飲み終つてから茶椀を茶托に伏せたりする事はよろしくありません。

### — 湯及び水の飲み方

水は、若し出されたら、そのまゝすぐ飲むで差しつかへありませんが、湯の場合ですと、しばらくそのまま置き、程よくさめた頃を見計つて飲むがよろしい。

取り急いで、あつい湯を口に入れて吐き出したり、或ひは吹いてさましたりするのは、甚だ見苦しいものであります。少しうつむき加減で、二口三口に、飲みほすのが作法であります。

### — 紅茶及びコーヒーのすゝめ方及び飲み方

コーヒー及び紅茶は、茶椀に八分目程つき入れ、把みの方を客の左手に出し、敷皿の上に正しくのせ、匙は茶椀の手前の方に柄を右にしてのせてすゝめます。

飲み方は、茶椀の把み手に程よく左の手をかけ、それより右の手で匙を持ち、靜かに匙にてかきまわし、元の如く皿の上に置いて茶椀を左の手で持ち上げ、右の手を軽くそへて飲みます。

### — お菓子のおすゝめ方

お菓子にも干菓子、蒸し菓子、西洋菓子、その他色々の種類がありますが、一般のすゝめ方は、綺麗に拭いた盆の上に、白紙を二枚斜に二つに折つてそのまゝ敷き、その紙の中央に格好よくお菓子を盛るのであります。これは干菓子等の盛り方でありませんが、羊羹やお饅頭のやうな蒸し菓子類であれば、何れも楊子をつけて差し出します。そして紙の折り目の方を客の方にすゝめます。それを置く場所は、客の左の膝の前から四五寸程はなれたる所に置きます。客が暇乞の挨拶があつたら、それと同時にその菓子を盆のまゝ自分の方に引きよせ、手早やく包み、盆にのせて客に持ち歸へるやうにとすゝめます。

— 果物のすゝめ方

果物と言ひましても、季節々々により種類も分れますが、その何品たるを問はず、皮をむかないものであれば盆又は皿、或ひは籠のやうな器に盛つて、必ずナイフをそへて出さねばなりません。この際皮入れの器をそへる事も必要であります。その食べ方は、先づ果物を手に取り、直ちに四つか六つ位に縦に割り、芯と種とを取り除き、皮をむき去つてから食べるのであります。これはリンゴ、梨、柿の場合であります。葡萄や蜜柑等の果物は、一旦口中に入れたらそれを出す際は、程よく目立ぬ

やうにして懐紙に受け、皮と共に不潔に見えぬやうに注意して始末を致します。

又、果物を皮をむいて差し出す場合は

蜜柑は——皮のついたまゝ縦に三つに切つて、器に盛つてすゝめます。

バナナは——皮のままでも差し支へはありませんが、皮をむいて一寸位に筒切りにして、小楊子か又は小さなホークをそへて出します。

桃は——皮をむいて、縦に四つに割つて核子を取り出し、皿に盛つて出します。

梨は——軸のついた方を一切れ小口切れにして、軸のきわまで皮をむき、軸とも二つ或ひは四つ位に割り、その大きい方は皮をむいて四つ、或ひは五つに切り、器に盛つてそれに軸つきの方をも盛りそへて出します。

柿は——皮をむき、縦に二つに割り、芯を取り、丸い方へ縦横に井桁に庖丁目を入れて差し出します。

林檎は——皮をむいて出す時は、皮をむいてからすぐ食鹽水にてよく洗ひ、のち切つて出します。之れは小口が黒ずんでくるのを防ぐためであります。

葡萄は——一房を二つ三つにちぎつて出します。

—サイダー類のすゝめ方

普通の客ならば、コップは空のまま盆にのせて出し、客の前でコップに注いですゝめます。この際、氷の薄片を少しコップに入れれば、尚ほ結構でございます。尚ほサイダー又はシトロンの口を座敷でぬく場合は餘程注意しないと、沸騰して泡が壘の上にごぼれたり、膝をぬらしたりいたします。

—お壽司のすゝめ方、食べ方

握りのかたい毛ぬき壽司や大阪壽司は箸で行儀よくいただきますが、東京風の壽司はあまり軽く握るために、いたたく時體裁が悪くなりますから、注意しなくてはなりません。何れも小皿に取り分けて、盆にのせ、楊子か箸をそへて各自小皿に醤油を入れてすゝめます。此の際客は、小皿に取り分けてすゝめられたならば、静かに箸を取りながら兩手にて皿を膝の上に取り、程よく箸にてはさみ、左手にうつし、直に箸を皿の上において、右の手にていただきます。

改つたものゝ言ひ方終

昭和十三年一月十五日印刷  
昭和十三年二月二十日發行

定價壹圓

東京市下谷區四町一番地  
印刷所 木村茂一郎

東京市下谷區四町一番地  
印刷所 神宮館印刷工場

發行所 木村書店

電話下谷 一三一七番  
漢替東京 九三七九七番

終